



Title	接尾的要素「-性」「-化」の日中対照研究
Author(s)	水野, 義道
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1985, 19, p. 3-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56534
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

接尾的要素「-性」「-化」の 日中対照研究

水 野 義 道

1. 目 的

筆者は、かつて日本語の接尾的要素「-中」について考察した際、中国語の「-中」の用法との比較を試み、それによって日本語の「-中」の特徴の一端を明らかにした。⁽¹⁾この論文では、日中両語において接尾辞的性格の強い「-性」「-化」を比較対照することによって、これらの字音語基の接尾辞的用法の特徴を明らかにしたい。

2. 方 法

「-中」について考えた時と同様に、まず「-性」「-化」と結合する語基を、その語形成における性質によって分類することにする。このような分類については、池上禎造氏⁽²⁾、森岡健二氏⁽³⁾、宮地裕氏⁽⁴⁾、野村雅昭氏⁽⁵⁾の論があるが、「-中」の分析と同様に宮地裕氏の論によることにする。これは「漢語の語構成を形態論のたちばから整理していつて、接辞・助辞のつきかたから、語基の品詞的能力を検討し、これを分類するという方法」⁽⁶⁾によるもので、字音語基を体言系（例：人間・作品）・相言系（例：自由・健康）・用言系（例：計画・生産）・副言系（例：普通・絶対）の四種類に分類するものである。本論では、この四種類に加えて、この四分類とは交差する性質のものではあるが、日本語において助辞をともなつて独立的に用いることのできない字音語基について、「結合形態」として独立した一類をたてる⁽⁷⁾（例：合理・積極）。この類をたてる理由は、結合形態が、助辞をともなつて独立的に用いることができないため、上述の四分類の適用が難しいことと、「-性」

「-化」との結合において独特な性質を持っていると思われるからである。また、「-性」「-化」と結合する語基としては、字音語基だけでなく、和語・洋語・混種語に分類されるものも含める。そうした方が、「-性」「-化」の用法をより正しくとらえることができると考えたからである。そしてこれら和語等の分類も字音語基の分類に準拠することにする。

中国語についても同様に、「-性」「-化」と結合する語基の形態論的性質による分類を試みた。中国語は、よく知られているように孤立語的性格の強い言語で、語の性質を表わすための語形変化が基本的になく、語順によって語と語の関係を示すという傾向が強い。そのため、分類の基準を日本語と統一することはきわめて困難である。ここでは、日本語の上述の分類を基礎におき、それとほぼ対応すると思われる次のような基準によって分類することにした。

- 1) 体言系——主語・目的語の位置にたつことができるもの。(例：規律・社会)
- 2) 相言系——程度副詞の「很(hěn—とても)」を前につけて修飾することができるもの。あるいは連体修飾機能しかもたないもの。(例：特殊・積極)
- 3) 用言系——それだけで述語となりうるもの(相言系に入るものを除く)。(例：闘争・創造)
- 4) 副言系——そのまま連用修飾ができるもの。(例：必然・偶然)。

日本語においてたてた結合形態に相当するものは、中国語においても存在するのではないかと思うが、数が少ないと思われることと、中国語の先に述べたような性質から、分類基準をたてるのが難しいので、中国語においてはたてなかった。日中両語を比較するための分類の枠組は、細かすぎると分類の時点で両語の特殊性が強く出てしまうし、また粗すぎてもあまり意味がないことになってしまう。今回は試みとして上記の四分類ないし五分類で分析を行なってみる。

こうして、中国語においても日本語に準じた形で分類を行ない、それを量的側面と文法的・意味的側面の双方から比較対照し、日本語・中国語それぞれの特徴を考えてゆく。

3. 資 料

資料は、日中両語ともコンピュータによる大規模なものを用いた。具体的には、日本語は国立国語研究所が行なった現代新聞の漢字調査⁽⁸⁾の資料であり、中国語はアジア・アフリカ言語文化研究所（東京外国語大学付置）の現代中国語資料⁽⁹⁾である。前者は「対象」を「昭和41年1月1日付から同年12月31日付までの三種の新聞（朝日新聞・毎日新聞・読売新聞）各1年分」とし、「サンプリング」により「抽出比60分の1でランダムに抽出したもの」を「標本」としており、「漢字調査」の「標本延べ字数」は「全体」で約「180万⁽¹⁰⁾字」である。後者は Princeton University Computer Center の Princeton Million Character Computer File を、アジア・アフリカ言語文化研究所の橋本萬太郎氏が、解釈・印出して、テープのコピーとともに持ち帰ったものである。これは、五四運動（1919年）以来の白話文百万字のテキストを機械処理したもので、テキストは小説・新聞から歴史・考古学まで、広いジャンルにわたっている。

資料の調査対象を見ると、日中両語ともに現代語という点では共通しているが、ジャンル、及び具体的な年代においてはかなりの差がある。理想的には、こうした点も共通した資料を用いることが望ましいが、今回は果せなかった。ともに現代語を対象としたものであり、百万字以上の資料であるという点を重視し、これらの資料を用いて日中両語の特徴を巨視的な立場でながめてみることにする。それらの特徴が時間軸の上でどのように形成されてきたかというような点は将来の課題として置くことにする。

なお、「一字の語基+性/化」（「A/B」は「AあるいはB」を表わす）という形式は考察の対象とはしなかった。理由は、「一字の語基+性/化」には、

「男性・品性・文化・消化」のように、「-性」「-化」が必ずしも接尾的要素とは考えられないものも含まれるからである。

4. 分 析

4. 1. 量的側面

上述の資料に現われた「～性」「～化」(二字以上の語基+性/化)を、上述の方法で分類し、その数量を表わすと〈表1〉のようになる。

言 語	接尾的要素 語基の形態論的性質	-性		-化	
	語数	延べ語数	異なり語数	延べ語数	異なり語数
日 本 語	体言系	100 (16.9)	53 (27.9)	325 (36.6)	117 (46.6)
	相言系	254 (42.9)	38 (20.0)	313 (35.3)	73 (29.1)
	用言系	124 (21.0)	51 (26.8)	85 (9.6)	29 (11.6)
	副言系	18 (3.0)	3 (1.6)	0 (0.0)	0 (0.0)
	結合形態	96 (16.2)	45 (23.7)	164 (18.5)	32 (12.7)
	合 計	592(100.0)	190(100.0)	887(100.0)	251(100.0)
中 国 語	体言系	257 (35.9)	66 (35.5)	179 (80.6)	44 (63.8)
	相言系	249 (34.8)	57 (30.6)	23 (10.4)	19 (27.5)
	用言系	130 (18.1)	58 (31.2)	18 (8.1)	5 (7.2)
	副言系	80 (11.2)	5 (2.7)	2 (0.9)	1 (1.5)
	合 計	716(100.0)	186(100.0)	222(100.0)	69(100.0)

〈表1〉日中両語の資料に現われた「-性」と「-化」
——語基の形態論的性質による分類と語数
(()内はパーセント、以下同様)

以下、量的側面において特徴的な点を、比較対照することによって考えてみる。⁽¹²⁾

4. 1. 1. 日本語の「-性」と「-化」の比較

「合計」の数値を比較すると、延べ語数・異なり語数ともに「～化」の方

が「～性」より多い。現代日本語においては、「-化」の方が「-性」より造語力の強い傾向があるということを暗示しているように思われる。ちなみに、造語力の強さの一つの指標であると思われる洋語（他の語種との混種語も含む）との結合例は、「～性」が3例、「～化」が21例である。

語基の形態論的性質についてみると、「～性」は、延べ語数において相言系が突出してはいるものの、異なり語数も考慮に入れると体言系・相言系・用言系・結合形態の間に大きなかたよりは見られないと言える。それに対して「～化」は、体言系・相言系が多く、結合形態がそれに次ぎ、用言系はかなり低い数値にとどまっている。この数値は「体言系の語基+化→用言系の語」「相言系の語基+化→用言系の語」という「-化」の機能⁽¹³⁾を裏づけていると言える。

4.1.2. 中国語の「-性」と「-化」の比較

「合計」を見ると、日本語とは対照的に、延べ語数・異なり語数ともに「～性」が「～化」より多く、その差が著しいことがわかる。このことは、中国語においては「-化」の造語力が「-性」より弱いことを示していると考えられる。

語基を見ると、「～性」は、体言系・相言系が多く、用言系がそれに次ぐという順序になっているのに対し、「～化」は、体言系が圧倒的に多く、相言系・用言系ともそれほど多くはない。

4.1.3. 日本語の「-性」と中国語の「-性」の対照

3で述べたように、日中両語の資料の規模が異なるので単純に比べることはできない。日本語の資料が180万字、中国語の資料が100万字ということから、中国語の延べ語数の合計を1.8倍してみると1289となり、日本語の2倍強になる。このことから、「-性」は中国語においてより頻繁に用いられるということが予想される。

語基を見ると、延べ語数において、日本語では体言系がやや少ないのに対して、中国語では体言系が一番多くなっている点が注目される。

4.1.4. 日本語の「-化」と中国語の「-化」の対照

4.1.3と同様に中国語の延べ語数の合計を1.8倍してみると400となり、日本語の $\frac{1}{2}$ 弱になる。「-性」と対照的に「-化」は日本語においてより頻繁に用いられると言えそうである。

語基については、日本語は体言系に次いで相言系もかなりあるのに対して、中国語は体言系が圧倒的に多いという違いが指摘できる。

4.2. 文法的・意味的側面

以下では、日中両語の「-性」「-化」をそれぞれ検討し、そのうえで対照を行なうことにする。

4.2.1. 日本語の「-性」

野村雅昭氏は「接辞性字音語基の性格」の中で次のように言っている：

また、「B〈相言類の語基〉+性」、「C〈用言類の語基〉+性」は、「B デアル(Cスル) コト」という意味で、「～性ガ(ヲ・…)」と格助詞をともなうことがおおいのに対して、「A〈体言類の語基〉+性」のばあいには、「～性ノ」というかたちで、連体修飾語になる傾向がつよい。つまり、傾向としては、「-性」の機能は、前部分の語基の品詞性をかえる、⁽¹⁴⁾はたらきにあるといってよいだろう。

ここでは、この説をもとにして、「連体修飾語になる」場合の用法を「連体用法」、それ以外の用法を「体言用法」として、この二つの用法について考えてみることにする。ここで言う「連体用法」とは、「熱帯性海水魚・金属性の調理器具・植物性タンパク」のように、被修飾名詞の属性を表わす用法を指し、同じ「～性ノ」という形でも、「人間性の回復・党派性のゆえ

に」などは「体言用法」とした。この「連体用法」「体言用法」を量的にみると〈表2〉のようになる。

用法 語基の 形態論的性質	連体用法	体言用法	合 計
体 言 系	31 (31.0)	69 (69.0)	100 (100.0)
相 言 系	1 (0.4)	253 (99.6)	254 (100.0)
用 言 系	28 (22.6)	96 (77.4)	124 (100.0)
副 言 系	0 (0.0)	18 (100.0)	18 (100.0)
結合形態	20 (20.8)	76 (79.2)	96 (100.0)

〈表2〉日本語の「-性」

——用法別延べ語数

連体用法は、体言系・用言系・結合形態の語基との結合に見られるが、量的にはそれほど多くないことがわかる。次に、それぞれの連体用法がどのようなものであるかをみてみる。

まず「体言系の語基+性」についてみると、連体用法と体言用法との間に相補的な関係があることがわかる。〈表3〉は、「体言系の語基+性」の用例について、連体用法と体言用法の可否、及び資料中での出現状況を示したものである。

用法 用 例	連体用法	体言用法
芸 術 性	× (－)	○ (＋)
国 民 性	× (－)	○ (＋)
人 間 性	? (＋)	○ (＋)
熱 帯 性	○ (＋)	? (－)
金 属 性	○ (＋)	? (－)
植 物 性	○ (＋)	? (－)

〈表3〉日本語の「-性」

——「体言系の語基+性」の用例と用法

(○は可能、×は不可能、?は疑問が残ることを表わす。
(＋・－)は、資料中に用例があった(＋)か、なかった(－)かを示す。

「熱帯性海水魚・金属性の調理器具」と同様な修飾関係で「^{*}芸術性建築・^{*}国民性の行事」(*はその語句あるいは文が一般的に容認されないことを表わす)などと言うことはできないと思われる。また、逆に「この物質の金属性を調べる」「この食品の植物性が体に良い」(?はその語句あるいは文の容認度が低いことを表わす)などという表現も一般的なものではないと思われる。ただ、この相補的な関係は絶対的なものではなく、例えば「人間性」には「人間性の出版社」という連体用法の用例も見られた。これは、人の目をひくための宣伝文句(コピー)であるために破格の表現を用いたとも考えられるが、このほかにも、連体用法で用いられているものの中には「方向性・習慣性」(用例：方向性地雷・習慣性早流産)のように、体言用法も可能であると思われるものがあつた。

このように、連体用法と体言用法との間には、絶対的なものではないが相補的な関係があることがわかった。次に連体用法の特徴を見てみると、以下のような点が指摘できる。

- 1) 病名等の医学用語の用例が9例あるが、そのうち8例までが連体用法である。(例：神経性便秘・病源性大腸菌)
- 2) 洋語の3例(このうち2例は医学用語)は全て連体用法である。
(例：リュウマチ性疾患・アレルギー性疾患)

用例数が十分でないので、誤った結論になるかもしれないが、連体用法は、専門用語、特に自然科学系の学術用語に多い、という文体的な特徴を指摘することができるのではないかと思う。

「相言系の語基+性」の連体用法は「尋常性座瘡」1例のみであつた。これは相言系に現われた唯一の医学用語であり、体言系でみた連体用法の文体的特徴と一致する。

「用言系の語基+性」の連体用法について見ると、割合の上でも、〈表2〉で見たとおり体言系とそれほど大きな差はなかったが、連体用法と体言用法の相補的な関係という点においても体言系と用言系は同様の傾向を示し

ている。ほとんどが体言用法である「生産性」に、1例だけ「生産性年齢」という連体用法が見られたが、これも専門用語的性格が強いと思われる。また、体言系と同様に、医学用語の用例が10例あったが、その全てが連体用法であった(例：進行性小児テンカン・開放性患者)。

「結合形態の語基+性」についても、連体用法の割合がやや少ないとはいえ、連体用法と体言用法との間に相補的な関係があるという点、医学用語その他の専門用語が多いという点は、体言系・用言系と同じである(例：先天性疾患・耐酸性総合胃腸薬)。

4.2.2. 日本語の「-化」

「-化」と結合した語は用言系の語となり、サ行変格活用動詞の語幹となるため、⁽¹³⁾「-性」で検討したような連体用法の問題はない。「スル」と結合してサ行変格活用動詞をつくる用法を「用言用法」、体言として主に助詞に接続する用法を「体言用法」として、量的にくらべると〈表4〉のようになる。

用法 語基の 形態論的性質	用言用法	体言用法	合 計
体言系	95 (29.2)	230 (70.8)	325 (100.0)
相言系	100 (31.9)	213 (68.1)	313 (100.0)
用言系	29 (34.1)	56 (65.9)	85 (100.0)
副言系	0	0	0
結合形態	37 (22.6)	127 (77.4)	164 (100.0)

〈表4〉日本語の「-化」
——用法別延べ語数

「～性」の連体用法が体言系・用言系・結合形態のみに見られ、相言系・副言系にはほとんど見られなかったのに対し、「～化」の用言用法と体言用法は、用例のなかった副言系を除き、どの語基の場合にも見られるということがわかる。用言用法の割合は、どの語基との結合においてもあまり違いはなく、全体的に体言用法が多い。

4.1.1でも触れたが用言系との結合例は体言系・相言系・結合形態との結合例に比べてかなり少ない。これが「-化」の用言化機能を反映していることは間違いないと思われるが、「用言系の語基+化→用言系の語」にはどのような意味があるのか、以下ではこの点について考えてみることにする。

「-化」と結合する用言系の語基は、次の三つに大別されると思われる。

a) 体言系と兼用で、体言系としての性格が強いもの（例：組織）

b) 相言的な意味を持ち、「～シテイル」の形で状態を表わすもの（例：孤立・安定・緊迫）

c) 「スル」を伴ない、継続的動作を表わすもの（例：拡大・冷却）

a) の語基は、体言系の語基として「-化」と結合していると考えられる。

b) の語基が量的には最も多く、用例の約7割を占めている。この類は「スル」と結合した形では、例えば「孤立スル」も「孤立化スル」もあまり違いがないように思われる。しかし、体言としての用法では、例えば「N国の孤立を望んではない」としたのでは「孤立シタ状態ニナル」という動的な意味が十分に表わせない。つまり、「-化」は、状態性の強い用言系の語基に変化の意味をつけ加える働きがあるということではないかと思う。

c) の語基については、b)と同様に「スル」と結合した形でその表わす意味があまり変わらないというだけでなく、体言として用いられた場合においてもb)において見られたほどの違いはないように思われる。例えば、次の例において、1と2、3と4は、それぞれほとんど同じ意味を表わしていると考えられる。

1. 中東戦争が拡大する。
2. 中東戦争が拡大化する。
3. 中東戦争の拡大が懸念される。
4. 中東戦争の拡大化が懸念される。

しかし、具体的なことがらについて見ると、例えば例5は普通だが、例

6 のようには普通言わないであろう。

5. 原稿を複写機で拡大する。

? 6. 原稿を複写機で拡大化する。

このように、「-化」と結合する前の用言系の語基が、具体的なことがら、抽象的なことがらの両方について使えるのに対し、「-化」と結合した形は、抽象的なことがらには使えるが具体的なことがらには使いにくいという傾向があるようである。「-化」と結合することによって、意味がある程度抽象化されるということであろう。この傾向はb)の語基についても見ることができる(例7～10参照)。

7. 飛行機が雲の上に出て安定した。

? 8. 飛行機が雲の上に出て安定化した。

9. インフレが収まり、物価が安定した。

10. インフレが収まり、物価が安定化した。

以上をまとめると、用言系の語基と「-化」との結合は、状態性の強い語基に多く見られ、その場合は変化の意味がつけ加えられる。そして、一般的に意味の抽象化を伴う、ということになる。

4.2.3. 中国語の「-性」

用法を見ると、日本語と同様に体言として用いられることが多い。そして、日本語の「-性」で考えた連体用法に相当する用法も見られる。その形式は「～性的××」(例：學術性的著作——中国語の表記は、誤解される恐れのない限り、現在、日本語において用いられている漢字を用いる)で、「～性」が「結構助詞」の「的(de)」を伴って修飾語を形成しており⁽¹⁵⁾、日本語の「～性ノ××」にあたる。そして、さらに中国語の「～性」には、次のような連用用法も見られた。

11. 即管是在消極性的評擊政治……(消極的に政治を批判しているのであっても……)

12. 自覚性的超越了春秋時代的……(自覺的に春秋時代の……を超越していた。)

この連用用法は、相言系に1例、用言系に2例見られただけであるが、相言系・用言系の語基の中には、「-性」と結合しても完全には体言化せず、それぞれ相言系・用言系の性質を残しているもの(あるいは場合)⁽¹⁶⁾があるということを示していると思われる。

以上の三つの用法をそれぞれ体言用法・連体用法・連用用法として、その量的な分布を見ると〈表5〉のようになる。

用法 語基の 形態論的性質	連体用法	体言用法	連用用法	合 計
体言系	20 (7.8)	237 (92.2)	0 (0.0)	257 (100.0)
相言系	8 (3.2)	240 (96.4)	1 (0.4)	249 (100.0)
用言系	19 (14.6)	109 (83.9)	2 (1.5)	130 (100.0)
副言系	3 (3.7)	77 (96.3)	0 (0.0)	80 (100.0)

〈表5〉中国語の「-性」
——用法別延べ語数

連体用法の割合は全体的に低く、用言系の方が体言系より高くなっている。また、「体言系の語基+性」について見ると、連体用法で用いられた語形の約6割が体言用法でも用いられている。このことから、日本語において見られたような「～性」の連体用法と体言用法の相補的關係は、中国語においては見られないと言うことができる。

4.2.4. 中国語の「-化」

用法について見ると、日本語の「-化」について考えた体言用法・用言用法に相当すると思われるもののほかに、4.2.3で考えた連体用法と形式上一致するものが見られた。体言用法に分類したものは、文の主題、動作・状態の主格、動詞・⁽¹⁷⁾「介詞」の目的語等となっているものであり(例13・14)、用言用法に分類したものは、用言のみにつきうる「動態助詞」⁽¹⁸⁾である「了

(le)」を伴なったもの、動詞の目的語を標示する「介詞」である「把(bǎ)」を用いて目的語を伴なったもの等である(例15・16)。

13. 中国的工業化必須依靠国内広大的農村市場……(中国の工業化は、国内の広大な農村市場に依拠しなければならない……)

14. 什么叫做大衆化呢？(何を大衆化というのか？)

15. 這是因為從前的曲芸城市化了……(これはかつての民間芸能が都市化して……したからである)

16. 清儒則把聖人書本化。(清朝の儒学者は聖人を書物化した——書物の中にとじこめた。)

連体用法は、4.2.3で考えた連体用法の「-性」を「-化」におきかえたもので、「～化的××」の形式を持ち、修飾語が被修飾語の属性を表わしていると考えられるものである(例17・18)。

17. 現代化的企業(現代化された企業)

18. 文言化的白話(文言化された口語)

以上三つの用法を量的に見ると〈表6〉のようになる。

用法 語基の 形態論的性質	用言用法	体言用法	連体用法	合 計
体言系	14 (7.8)	101 (56.4)	64 (35.8)	179 (100.0)
相言系	9 (39.1)	14 (60.9)	0 (0.0)	23 (100.0)
用言系	4 (22.2)	14 (77.8)	0 (0.0)	18 (100.0)
副言系	0 (0.0)	2 (100.0)	0 (0.0)	2 (100.0)

〈表6〉中国語の「-化」

——用法別延べ語数

体言系の連体用法は、特定著作で多用されているため大きな数字になっているが、この点を考慮に入れば用言用法とそれほど大きな差はない。全用例数が少ないので推測の域を出ないが、相言系・用言系は、全体の用例数が少なく連体用法の用例がないこと、そして、用言用法の割合が体言系より高いことから、相言系・用言系に「～化」の形式が使われるようにな

ったのはそれほど古いことではなく、まだ「-化」の動詞としての本来の意味が強く働いていると考えることもできるのではないかと思う。また、日本語と比べて相言系の用例数が少ない点については、中国語の相言系の語基⁽¹⁹⁾の性質が用言系の語基の性質に似ているということから、相言系の語基についても「-化」による用言化を必要としないものが多いと言えるためであろうと思われる。

用例数は少ないが、「-化」と結合した用言系の語基は、4.2.2のa) c)に対応する二種類に分けられると思われる。

- a') 体言系と兼用で、体言系の語基として「-化」と結合していると思われるもの（例：合作化・生活化・革命化）
- c') 継続的動作を表わし、「-化」をつけることによって動詞としての意味が抽象化されられると思われるもの（例：拡大化・凝固化）

日本語のb)に相当する語基は、中国語ではほとんどが相言系に属するため、ここには現われてこない。

4.2.5. 日本語の「-性」と中国語の「-性」の対照

まず、日中両語の「～性」の用法を対照するために、〈表2〉と〈表5〉を比べることにする。この二つの表の連体用法に注目すると、日本語は体言系・用言系・結合形態にはば限られている点、そしてこれらの割合は中国語のそれに比べてかなり高くなっている点が指摘できる。

4.2.1で見たように、日本語の「～性」の連体用法と体言用法との間には相補的な関係があり、連体用法は専門用語に多いという文体的特徴が認められた。それに対して中国語の「～性」では、4.2.3で見たように、連体用法と体言用法との間に相補的な関係は見いだせなかった。さらに、中国語の「～性」には連用用法も見られたが、こうしたことには、日本語には、体言としての「～性」に対応する形で「～的ナ/ニ」という相言の形式がある（例：芸術性→芸術的）のに対し、中国語には、この日本語の

「-的」に機能上対応する形式がないということが関係していると考えられる。中国語の連体用法・連用用法には、次の例のように、日本語の「～的な/に」に対応すると思われるものが少なくない。

- 19. 歴史的任務（歴史的〈な〉任務）
- 20. 創造的労働（創造的な労働）
- 21. 自覚的超越了（自覚的に超越した）

「-性」と結合して連体用法を持つ日本語の語基の中には「-的」とも結合して連体用法を持ち、微妙な意味の違いを表現しうるものがある（例：金属性の・金属的な）。このような区別は、上のような状況を見ると、中国語で表現することは難しいと思われる。以上のような日本語の「～性」の連体用法は、中国語にはない日本語に特徴的な用法であると考えられるのではないと思われる。

次に「体言系の語基+性」について対照してみる。〈表1〉から、日本語の「体言系の語基+性」の割合は、中国語のそれに比べてかなり低いことが分る。中国語に比べて日本語の方が、体言系と「-性」との結合に対する制約が強いと解釈できるのではないと思う。さらに、〈表2〉〈表5〉によって「体言系の語基+性」の連体用法の割合を対照すると、日本語は中国語よりずっと高い。このことから、野村氏の指摘した「-性」の体言化機能、及びそれに伴う「体言系の語基+性→相言系の語」という傾向は、⁽¹³⁾中国語と対照した場合に、日本語に特に顕著であると言えるのではないと思われる。

4.2.6. 日本語の「-化」と中国語の「-化」の対照

4.1.4でも見たように、〈表1〉から、日本語に比べて中国語の全用例数が少ないこと、中国語は体言系に偏っていること、が指摘できる。このことは、4.2.4で考えた中国語の「～化」が現在発達しつつあるという見方の一つの支持材料になっている。

〈表4〉と〈表6〉によって用法を対照すると、中国語には連体用法があるが日本語にはないということがわかる。しかし、これは日中両語の文法構造の違いによるものであって、中国語の連体用法に対応するものは日本語の用言用法に含まれると考えて良い。中国語では、次のように、「体言一体言」「相言一体言」「用言一体言」の修飾関係が全て「結構助詞」である「的(de)」によって表わされる。

22. 歴史的書(歴史の本)

23. 特殊書(特殊な本)

24. 出版的書(出版する/した・本)

「～化的××」は、例17・18からも分るように、日本語では「～化サレタ××」となる。

この点を考慮に入れると、用法の上では、日中両語の間にはそれほど大きな差はないと言えると思われる。

「用言系の語基+化」についても、〈表1〉を見ると割合の上では日中両語の間にそれほど大きな差はないし、語基の特徴、および「-化」と結合した場合の意味の変化についても、4.2.2と4.2.4で見たように共通した面が目立つ。

「-化」は、相対的に中国語において用いられることが少ない。これが「～化」が中国語において現在発達しつつあることの表われであれば、今後の動きが注目される。用法と「-化」の用言化機能という点においては、日中両語の間にそれほど大きな差はないと考えられる。

注

- (1) 拙稿「漢語の接尾的要素『-中』について」(『日本語学』3-8、1984、8)
- (2) 池上禎造「漢語の品詞性」(『国語国文』昭和29年11月——『漢語研究の構想』岩波書店1984所収)
- (3) 森岡健二「日本文法体系論」(『月刊文法』昭和43年11月～昭和46年3月)
- (4) 宮地 裕「現代漢語の語基について」(『語文』31、1973)
- (5) 野村雅昭「三字漢語の構造」(国立国語研究所報告51『電子計算機による国語研

究Ⅵ』、1974)

- (6) 注(4)の論文 P.74
- (7) この五類に分類する考え方は野村氏の考え方と共通するが、体言・相言兼用類等の兼用類を別にたてることはしなかった。
- (8) 国立国語研究所報告56『現代新聞の漢字』(1976) 参照。
- (9) 橋本萬太郎他「AA 研白話文語法資料の機械処理」(『中国語学』222、1975) 参照。
- (10) 注(8)の報告書 pp.4-5
- (11) ここで用いている「白話文」は、「現代中国語文」とでも言うべき意味のものとあり、1918年以前のもの(例えば元・明・清朝の「白話小説」など)は含まない。
- (12) 本論では、日本語(中国語)の内部の要素を比べる場合に「比較」、日本語の要素と中国語の要素を比べる場合に「対照」というように便宜的に用語を使い分けておく。
- (13) 野村雅昭「接辞性字音語基の性格」(国立国語研究所報告61『電子計算機による国語研究Ⅸ』1978) P.133
- (14) 注(13)の論文 P.132。〈 〉内は、野村氏の論文により筆者が補足した。A・B・Cは、それぞれ体言系の語基・相言系の語基・用言系の語基に相当する。
- (15) 資料には現われなかったが、「～性××」という「的(de)」を介さない形式も、現代中国語では普通に見られるようである。「結構助詞」については、注(17)の編著 P.14 参照。
- (16) 「相言系の語基+性」のこのような性質については、次の論文に言及が見られる。勞寧「關於詞尾的“性”」(『中国語文』1955年4月)
- (17) 呂叔湘主編『現代漢語八百詞』商務印書館、1981、P.12参照。前置詞にあたるもの。
- (18) 注(17)の編著 P.14 参照。
- (19) 同上 P.11 参照。

〈付記〉

本稿は、1985年1月、大阪大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部をまとめたものである。指導して下さった徳川宗賢教授・宮地裕教授・真田信治助教授、及び、資料の使用にあたって御助力下さった国立国語研究所の野村雅昭氏、アジア・アフリカ言語文化研究所の橋本萬太郎氏に心から感謝したい。

(大学院後期課程学生)